裾花川扇状地遺跡群

寺　村　遺　跡

－㈱マルイチ産商高田事務所建設地点－

1997・3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化とともにものの豊かさから心の豊かさを求められて久しい今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできない必須要件の一つであり、国民共有の財産であることは言うまでもありません。市民生活の充実、公共の福祉という目的を達成するため、民間や公共をとわず多くの開発事業が実施されることになりますが、そのかげで失われていく土地に刻まれた歴史－埋蔵文化財－にたいし、私たちはその保護と保存および公開という点において大きな責務を負っているとも言えるでしょう。

長野市域には1,300余の遺跡が周知されています。中でも千曲川両岸は自然堤防が発達しており、弥生時代から平安時代にかけての大規模な集落が形成されていますし、長野市北部には縄文時代以降の遺跡をもって浅川扇状地遺跡群が展開しています。一方、長野市街の中心部にあたる裾花川扇状地は、ふるくから市街化が進んでおり数遺跡が確認されているにすぎませんでしたが、近年再開発等により新発見の遺跡が徐々に増えてまいりました。しかし、遺跡の範囲や内容に不明の点があり、裾花川扇状地遺跡群の中の一地点遺跡として認識されるにすぎません。

今回発掘調査を実施した寺村遺跡もこうした性格の遺跡であります。近隣に長野市指定史跡南向塚古墳が構築されており、扇状地の西側上方に西方遺跡が存在していますが、今のところこれらの遺跡との関係はわかっていません。調査面積は事務所の建設地という狭い範囲でありましたが、裾花川扇状地の扇央部における遺跡の存在と古代史解明に一石を投じたものと考えています。

ここに長野市の埋蔵文化財第86集として発掘調査報告書を発刊するにあたり、多大なご協力・ご指導をいただいた株式会社マルイチ産商ならびに関係各位に心からお礼申し上げます。

平成９年３月

長野市教育委員会
教育長　滝澤忠男

例　　言

1　本書は、株式会社マルイチ産商高田事務所建設に伴う緊急発掘調査報告書である。

2　調査は、株式会社マルイチ産商代表取締役仁科恵敏と長野市長塚田　佐との委託契約に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターの直轄事業として実施した。

3　調査地は、長野市大字高田字寺村1340-1番地である。

4　発掘調査は、平成８年９月11日から10月４日にかけて実施し、調査対象面積は400㎡である。

5　本書は、発掘調査によって検出した遺構、遺物の基本資料を提示した。遺構図は１：80、遺物図は１：４を基本縮尺とした。

6　遺構測量は、平面直角座標第Ⅷ系の座標値と日本水準原点の標高を基準とするコーデックシステムを援用するため、㈱写真測図研究所に委託した。

7　土器実測図のうち断面が白抜きのものは土師器・黒色土器、アミ掛けのものは灰釉・緑釉陶器を表す。土器実測図番号と写真番号は一致する。

8　遺構分布図等に略号を用いた。住居址（ＳＢ）・溝址（ＳＤ）である。

9　遺跡の略号はＴＲＭである。調査によって得られた諸資料は長野市埋蔵文化財センターで保管している。

目　　次

序

例言・目次

Ⅰ　調査の経過……1

　1　調査の事務経過……1　　2　調査の体制……1

Ⅱ　調査地周辺の環境……3

　1　地理的環境……3　　2　考古学的環境……3

Ⅲ　遺構と遺物……7

挿　図　目　次

1図　調査地と裾花川扇状地…… 2
2図　長野市防災基本図地形分類図…… 4
3図　調査地周辺の裾花川扇状地遺跡郡…… 5
4図　調査地周辺の地形図…… 6
5図　遺構分布図、１号住居址実測図…… 7
6図　２～６号住居址実測図…… 9
7図　2・3・6号住居址出土土器実測図…… 10
8図　６号住居址出土土器実測図…… 11

Ⅰ　調査の経過

1　調査の事務経過

平成７年12月22日付　長野市長宛都市計画法第32条の規定による「開発行為に関する事前協議申出書」の提出がある。

12月27日付　建設部建築指導課長より「㈱マルイチ産商の事前協議について」埋蔵文化財の保護について照会がある。

平成８年１月８日付　㈱マルイチ産商宛に周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内にあり、確認（試掘）調査が必要の旨回答する。

平成８年５月１日付「開発行為に伴う埋蔵文化財確認調査について（依頼）」を受理する。

５月20日　確認（試掘）調査を実施する。

５月28日付　遺跡の発見と埋蔵文化財の保護措置が必要の旨回答する。

７月８日付　文化庁長官宛文化財保護法第57条の２第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」を受理する。同日付　記録保存のための発掘調査が必要の旨の意見を付して県教育委員会教育長宛に進達する。

７月25日付　県教委教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」がある。

８月２日付　文化庁長官宛文化財保護法第98条の２第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を県教委教育長に提出する。

９月４日付　「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結する。

９月11日～10月４日　発掘調査を実施する（実質稼働10日）。

10月４日付　㈱マルイチ産商代表取締役・県教委教育長宛「発掘調査終了（届）」を提出する。

10月８日付　長野中央警察署長宛「埋蔵物発見届」、県教委教育長宛「埋蔵文化財保管証」を提出する。

11月８日付　県教委教育長より「埋蔵物の文化財認定について（通知）」がある。

平成９年３月17日付　「埋蔵文化財発掘調査変更委託契約書」を締結する。減額変更。

３月28日付　長野市の埋蔵文化財第86集『裾花川扇状地遺跡群寺村遺跡』を刊行する。

2　調査の体制

調査主体者　長野市教育委員会教育長　滝澤忠男
総括管理者　埋蔵文化財センター所長　丸田修三
庶　務　係　　所長補佐兼庶務係長　小林重夫
　　職　　員　青木厚子
調　査　係　　所長補佐兼調査係長　矢口忠良（総括事務）
　　主　　査　青木和明
　　〃　　千野　浩
　　主　　事　飯島哲也
　　〃　　風間栄一（保護協議、試掘調査）
　　〃　　小林和子（主任調査員、報告書編集、遺構・遺物写真、遺物実測・浄書）

専門主事　清水　武

専 門 員　中殿章子・西沢眞弓（遺構整図・浄書）・山田美弥子・小野由美子・堀内健次・藤田隆之・勝田智紀（調査員）・宮川明美・小林まゆ佳

発掘作業員　上原芳子・北沢　真・小林春江・小山さと子・清水八郎・竹田モト子・竹本祐一・徳竹勇次・富岡実子・中澤けさよ・中條悦子・中村　清・中村邦夫・中村納子・鈴木よしみ・三上文子・吉原幸子・和田千代子・和田文雄

整理作業員　岡沢治子・小泉ひろ美・徳成奈於子・西尾千枝・向山純子・松沢ナオエ・倉鳥敬子

1図　調査地と裾花川扇状地(★印)（1：50,000）

Ⅱ　調査地周辺の環境

1　地理的環境

現在の裾花川は山間峡谷を縫うように流下して来たものが、県庁付近から流路を南方向に変え直交的に犀川に流れ込んでいる。この県庁以南の流路は慶長年間に城代家老の花井吉成・吉雄父子により開削されたものといわれている。また、扇状地内の用水路の大改修も行われ、八幡堰を幹線水路とし支線水路が整備されたようである。現在長野市街南部を流れる裾花川取水の主要用水路は、北から鐘鋳川から派生する中沢川・北八幡川・南八幡川・古川・計渇川・前堰・宮川等がある。これらは扇状地の等高線を縦断するように流下しており、近世に大きな改変が行われたとしても旧裾花川の流路を利用したものと考えられる。扇状地扇央から扇端部にかけてこの傾向が顕著にみられ、旧河道・氾濫平野・扇状地内の低地に開削されている。裾花川扇状地の遺跡を認定するとき、これらの用水の在り方が大いに役立つ。何故なら低地と微高地の判断が容易であるからである。ただし、扇央から上流の扇頂部は市街化が進み低地と微高地の差を地形から判断することが困難であるが参考になる（1・2図）。

調査地周辺を瞥見すると北と南に帯状の氾濫平野が形成され、北縁に南八幡川とその支流こどふ堰が、南縁に古川から派生した南侯大堰の支流が造られている。これらの用水路に囲まれた部分は比高差が1m近くある微高地になり、上流部には西方遺跡や中世の中沢城跡が、近郊には南向塚古墳が存在している（4図）。

2　考古学的環境

市街化が進んでいるため周知の遺跡数は多くないものの、ここ数年来の再開発によって本遺跡を含めて新発見の遺跡が増加している。扇央部の遺跡として次に紹介する5カ所の遺跡のうち西方遺跡・八幡田沖遺跡・芹田小学校遺跡がこれにあたる（3図）。

2西方遺跡　国補街路事業（栗田屋島線高田）に伴う発掘調査が平成6・7年度に実施された。6年度の検出遺構は奈良時代の溝址7条・平安時代の住居址3軒・土坑3基・溝址1条を検出した。奈良時代の溝址から古墳時代の土器類・滑石製有孔円板、飛鳥時代の土師器・須恵器が出土している（長野市埋蔵文化財センター『所報6』平成7年）。7年度では古墳時代前期住居址3軒、古墳時代後期～奈良時代の住居址3軒、平安時代住居址内カマド・土坑・溝址等が検出された。古墳時代前期の住居址は大型のもので床面から多量の土器が出土した。遺跡が所在する微高地には南向塚古墳が構築されており、時期的に合致した集落遺構が確認できたことは双方の関連性を考える上で大きな成果といえよう（『所報7』）。

3八幡田沖遺跡　平成5年の稲葉南保住宅造成事業と平成6年の信越郵政研修所庁舎建設事業に伴う発掘調査が実施された。前者は1,200㎡の調査区から弥生時代1軒・古墳時代前期3軒・古墳時代後期～奈良時代6軒・平安時代17軒の住居址のほかに、平安時代の建物址・土坑、溝址等を検出した（『所報5』）。後者は200㎡が調査され、奈良・平安時代の建物址1棟と溝址2条を検出したにすぎない。住居域の縁辺部と考えられ、遺跡の南限をしめす（『所報6』）。

4芹田小学校遺跡　昭和61年に校舎改築に伴い発掘調査が実施され、平安時代の住居址が2軒検出されている。共に一辺が8m代と6m代の大型に属する住居址で、古代芹田郷との関係が予想されている（長野市教育委員会『芹田小学校遺跡』昭和62年）。

5南向塚古墳　全長47.5mの前方後円墳と考えられている。この古墳の特異な点はその立地にある。他の前方

後円墳が山頂に構築されるのに対し、南向塚古墳のみ犀川・裾花川等の氾濫の危険性がある沖積地の真ん中に築かれているのは謎である。内部構造も不明で、年代を比定することは難しい。長野市指定史跡（長野市教育委員会『新訂長野市の文化財』平成３年）。

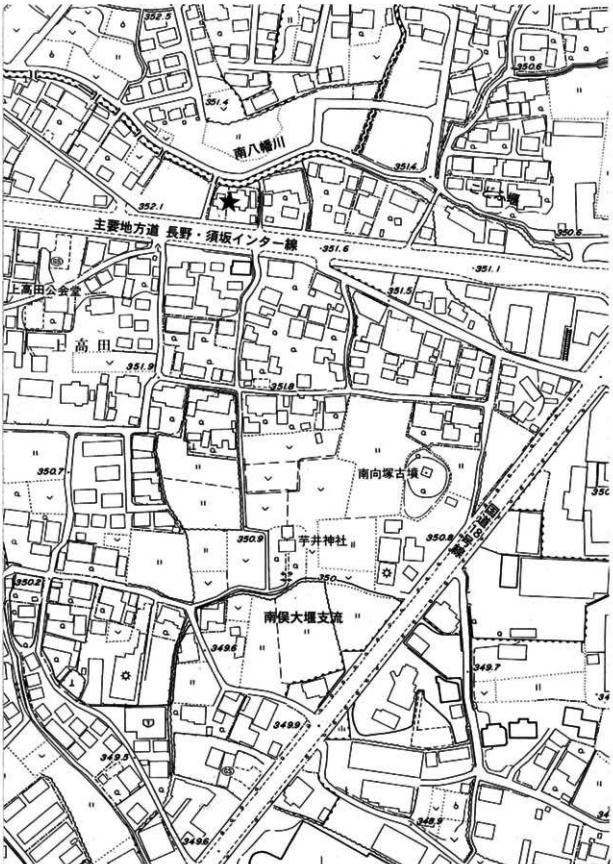
６中沢城跡　後世の開発により削平等で破壊され、面影をとどめていない。西方遺跡の調査の際に道路拡幅部の一部に試掘坑を入れた。調査では深さ１ｍの堀状の落ち込みを確認したが対辺は攪乱のため確認されない（『所報５』）。

Fg 緩扇状地　f 氾濫平野　Fs 扇状地内の低地　O 旧河道

２図　長野市防災基本図地形分類図（１：25,000）

1 寺村遺跡　2 西方遺跡　3 八幡田沖遺跡　4 芹田小学校遺跡　5 南向塚古墳　6 中沢城跡

3図　調査地周辺の裾花川扇状地遺跡群（1：10,000）

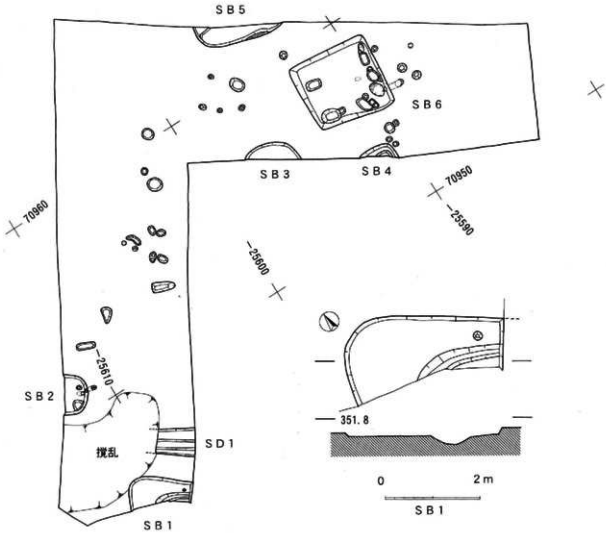


4図　調査地周辺の地形図（1：2,500）

Ⅲ　遺構と遺物

調査地はもと住宅が建っていたところで、遺構確認面まで更地化のため撹乱が著しく調査を困難なものにした。試掘調査で確認された土層序は現地表下約40cmで黄褐色粘質土層（遺物包含層）に至り、更に約60cmで明黄褐色粘質土の基盤層（遺構確認面）に達する。また、この土層の下部層には遺構面は存在せず単一の包蔵地である。

調査対象地は遺跡の破壊が懸念される事務所建物敷地に限定した。北方向に対し長方形を二つ直交した「へ」の字形を呈する調査地である。そのため小穴を除き遺構の全形態を露呈できたのは６号住居址の１軒にすぎない。他の遺構は全体の３／４以上が調査対象区域外にあるものと考えられ、形態が隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものと想定されるものの規模等は不明である。住居址を想定し大形の６遺構に番号を付したが、明らかに住居址と認定されるものはカマドが構築されている２号・６号住居址の２軒のみである。また、遺物でも前記した２軒の住居址出土品の他に、３号住居址の土師器坏が１個あるほかにみるべきものはない。土器類は全てロクロによって成形もしくは調整を行っており、土師器・黒色土器の底部には回転糸きり痕を残す。



５図　遺構分布図（１：200）、１号住居址実測図（１：80）

2号住居址

遺構（6図）　検出部分は東壁側の一部にすぎない。形態は各壁がともに丸味を帯びる隅丸長方形を想定する。単軸の東西規模は2.18mを測り、主軸方向はS45°Eになる。カマドは東壁中央に構築されるが、煙道の掘り抜き方向が壁に対して北に傾く。火床は浅く窪み焼土塊化し、中央に角礫の支脚石を埋め込む。カマド右袖部に構築石材が残存していた。右隅には貯蔵穴と考えられる土坑がある。床面は平坦で軟弱である。

遺物（7図）

2号住居址出土遺物観察表

番号	種別	器種	法量（cm）			遺存	特記事項	番号	種別	器種	法量（cm）			遺存	特記事項
			口径	底径	器高						口径	底径	器高		
1	土師	坏	11.1	5.1	3.4	4/5	底ヘラ記号	6	土師	坏	12.9	6.4	4.0	完形	
2	〃	〃	10.0	4.5	4.0	1/5		7	〃	〃	14.3	4.5	5.2	1/2	
3	〃	〃	10.5	4.8	3.6	完形		3号住居址出土遺物観察表							
4	〃	〃	10.3	4.0	3.2	〃		8	土師	坏	9.0	3.8	2.2	完形	
5	黒色	〃	13.5	4.4	4.8	〃									

6号住居址

遺構（6図）　全体を露呈できた唯一の住居址である。形態は方形を呈し、主軸（ほぼ東西）4.4m・南北4.0mの規模である。東壁の右隅付近にカマドが構築されるが、既に破壊を受け構築石材が散在していた。火床は焼土塊化し3cm程窪み、焼土及び炭化物を残存していた。煙道は壁外に約70cm掘り抜かれている。カマド周辺には浅い不規則な掘り込みがみられ、食膳具を中心に散在状態で出土した。床面は平坦であるがそれほど堅緻なものではなかった。西壁に添って2個の楕円形を呈する土坑状掘り込みがあるが、対辺の東壁に認められないことから柱穴の可能性はうすい。

遺物（7・8図）

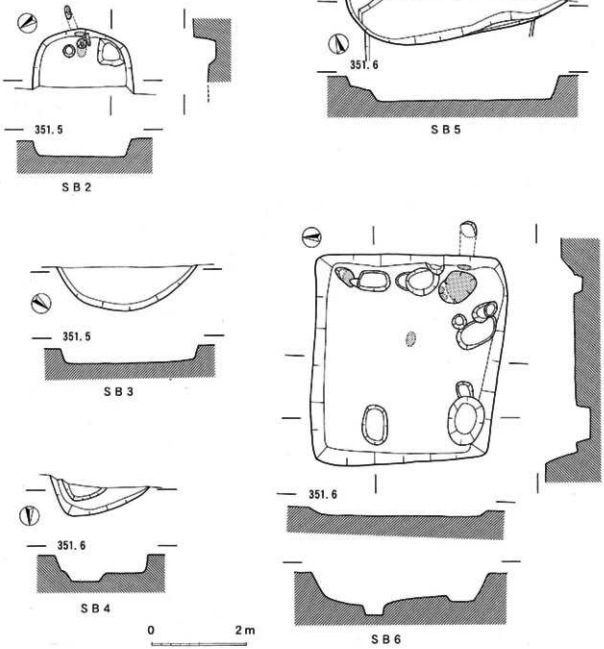
6号住居址出土遺物観察表

番号	種別	器種	法量（cm）			遺存	特記事項	番号	種別	器種	法量（cm）			遺存	特記事項
			口径	底径	器高						口径	底径	器高		
9	土師	坏	11.7	5.0	3.1	完形		24	土師	坏	14.0	5.3	5.5	3/4	
10	〃	〃	12.6	6.3	3.6	1/2		25	〃	〃	11.6	5.8	3.3	1/4	
11	〃	〃	10.1	4.2	4.5	1/4		26	灰釉	皿	14.9	6.7	3.4	1/4	内刻書
12	〃	〃	13.2	6.5	4.0	〃		27	黒色	椀	11.7	6.2	4.0	〃	
13	黒色	〃	11.7	4.2	3.3	1/5		28	〃	〃	11.3	6.2	4.8	完形	
14	土師	〃	10.7	5.0	3.3	4/5		29	緑釉	皿	12.9	6.6	2.6	3/5	内重焼痕
15	〃	〃	10.8	4.6	3.5	1/4		30	〃	椀		8.9		1/4	
16	〃	〃	11.1	4.8	3.6	3/4		31	灰釉	〃	14.8	7.1	5.2	1/2	
17	黒色	〃	11.2	4.3	3.9	1/5		32	土師	〃	13.3	6.2	5.4	4/5	
18	土師	〃	11.2	4.7	4.0	〃		33	〃	〃	13.9	7.7	5.9	1/2	
19	〃	〃	11.4	4.5	3.6	1/4		34	黒色	〃	14.9	7.3	6.8	完形	
20	〃	〃	11.2	4.8	3.7	4/5		35	〃	鉢	12.5			1/4	
21	〃	〃	13.3	5.4	4.0	3/5		36	土師	甕	21.8			1/2	ロクロ
22	黒色	〃	12.8	5.9	4.0	3/5		37	〃	〃	17.3			〃	〃
23	土師	〃	12.5	5.6	4.1	3/4		38	〃	〃	19.0	9.0	19.0	3/5	〃・ヘラケズリ

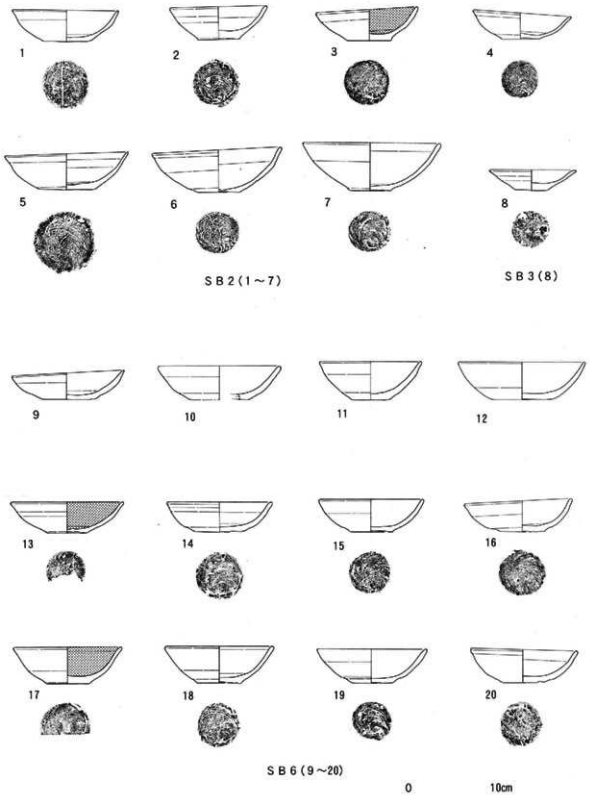
住居址の年代

２号住居址出土土器のうち土師器坏１～４の口径の平均は10.5cm、器高が3.5cmを測り、器体規模が縮小傾向にある。平安時代10世紀後半の時代・時期が求められる。６号住居址出土の坏の口径及び器高ともに２号住居址より大きな数値になり、これより前代の10世紀中葉頃の所産と考えられる。３号住居址の形態がわかる土器は坏１個体にすぎないが、口径９cm・器高2.2cmと大幅に小型化しており、11世紀前半頃に比定されるものと考えられる。

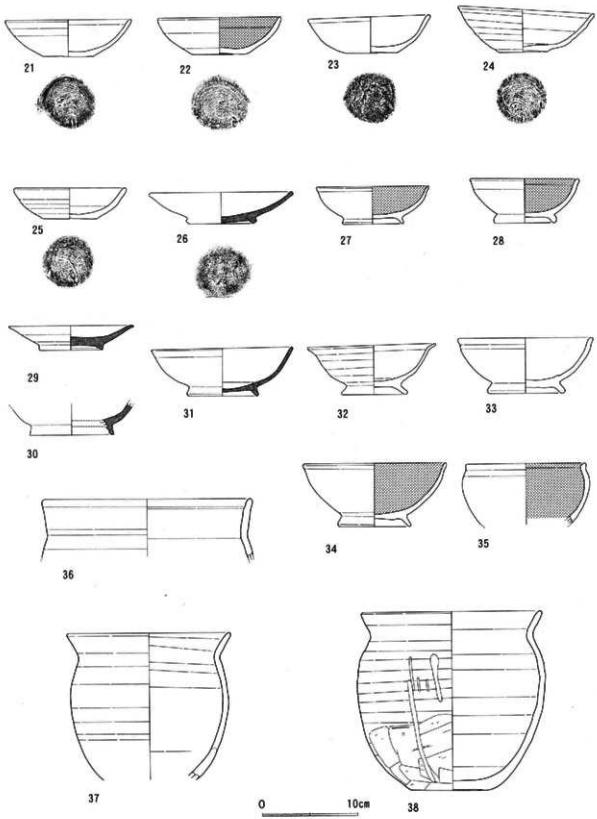
以上のように狭い調査地であったが、少なくとも３時期の時間差がある。６号から２号住居址へ接続するものの、３号住居址出土の土器の時期に至るまで若干の時間差を有し継続していない。今のところ寺村遺跡は10世紀中葉から後半にかけて盛期があり、11世紀前半まで続く集落遺跡と考えられる。



６図　２～６号住居址実測図（１：80）



7図　2・3・6号住居址出土土器実測図（1：4）



8図　6号住居址出土土器実測図（1：4）

SB2

SB6

SB2

SB3

SB6

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

27

28

32

33

34

31

26

29

37

38

SB6

報告書抄録

ふりがな	すそばながわせんじょうちいせきぐん　てらむらいせき
書名	裾花川扇状地遺跡群　寺村遺跡
副書名	㈱マルイチ産商高田事務所建設地点
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第86集
編集者	矢口忠良・小林和子
編集機関	長野市教育委員会埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212　長野県長野市小島田町1414　TEL026-284-0004
発行年月日	平成９年３月28日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
裾花川扇状地遺跡群寺村遺跡	長野県長野市高田字寺村	20201	B－021	36度38分52秒	138度12分52秒	960911～961004	400㎡	事務所建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
裾花川扇状地遺跡群寺村遺跡	集落跡	平安時代	住居址６軒 内カマド有２軒	土師器坏・椀・甕 灰釉陶器皿・椀 緑釉陶器皿・椀	裾花川扇状地内微高地の集落跡

長野市の埋蔵文化財第86集

裾花川扇状地遺跡群

寺村遺跡

平成９年３月26日 印刷
平成９年３月28日 発行

編集　長野市教育委員会
発行　埋蔵文化財センター
印刷　奥山印刷工業株式会社